

河西宏祐著

『全契約社員の正社員化』

——私鉄広電支部・混迷から再生へ(1993年～2009年)——』
(早稲田大学出版部、2011年、A5判、286頁、定価6,100円+税)

嗟峨 一郎
(熊本学園大学)

1. 「広電現象」

ハードカバーで280余ページ、外見からするといかにも堅い印象の本である。構成のどっしりした学術書という意味ではそのとおりだが、内容は人間味があふれる、いわば「河西ワールド」が繰り広げられる労作である。

まず本書が扱っているテーマの舞台から紹介しよう。それは「広島電鉄株式会社」で、路面電車、鉄道(宮島線)、バス(市内、郊外)などを運行する中国地方の中核的企業である。さらにいえば、中国5県における私鉄産業のなかでは唯一の大企業とっていい(2010年11月現在で全従業員1,301人)。

そしてこの舞台に登場する主人公は私鉄中国労働組合広島電鉄支部(以下「広電支部」と略)である。この広電支部が主人公として相応わしい理由とは、同支部が次のような偉業を実現したからに他ならない。

2009年6月、広島電鉄の労使は「全契約社員の正社員化」について合意に達した。だが同社は必ずしも豊かな資産にめぐまれた大企業ではないから、問題は簡単ではなかった。会社側が賃金原資を増額する一方、正社員のなかには最高で月額5～6万円減額になるケースが生じることになったからである。結局支部執行部は、一部正社員の賃金減額という痛みをあえて抱えこむ方針を提案し、「全契約社員の正社員化」を実現した。

これは驚くべきこととっていい。よく知られているように、21世紀初め、グローバル化を背景にした規制緩和の嵐が国内で吹き荒れ、雇用労働者全体に占める非正規労働者の比率は早くも2003年度には30%を超えた。広島電鉄はこうした風向きに逆の解答をつくり、それを実現してみせたわけである。この快挙は

広くメディアに取り上げられて「広電現象」と呼ばれるようになったばかりか、広電支部は国際自由労連の国際会議にも招待されるにいたった。本書はこの貴重な実例に正面から迫ろうとした労作である。

具体的な中身に入る前にあらかじめ指摘しておきたい点がある。それは、本書がたんに資料を机上で分析してみせたものではなく、著者が社会学の研究者として一貫して重視してきた方法（調査）を駆使しており、これが本書の大きな特徴になっていることである。

著者によれば、社会学はあくまでも〈人間〉研究の学問という原点の上に立つ。このことは研究者の姿勢についても同じである。研究者は、研究対象たる当事者にたいして「研究者の論理」をおしつけてはならず、逆に、できるだけその時代のその状況のなかに我が身をおいて考察する努力が必要となる。例えば松島静雄の「友子」調査が最高峰の水準を保っている根拠は、松島じしん労働者のなかに入り込んで〈心と体〉によって労働者の実態を把握したからである。著者は次のように強調する。敗戦直後の飢餓の時代に、大学を卒業したばかりの若い松島静雄が、食糧をつめたリュックをかつぎ、各駅停車の蒸気機関車を乗りつぎながら秋田や茨城の鉱山を訪ね歩いた単独の苦行が、読む者の心を打つ優れた労働調査を生み出したのである、と。（詳しくは河西宏祐『日本の社会学』序章）

この姿勢は本書においても全く変わっていない。本書には膨大な資料の分析がみられるが、同時に、著者が広島電鉄の従業員たちとじかに接しその息吹を吸い上げようとする姿が、リアルに浮かび上がってくる。

2. 広電支部の柔軟な発想

著者は広島電鉄について「わずかに組合優位型の労使関係を維持していた私鉄産業」と評価しているが（85頁）、実際は必ずしもはじめから組合優位型だったわけではない。このことは本書の編別構成にもあらわれている。

本書があつかう時期は1990年代初めから2009年までだが、この時期の前半は組合が規制緩和・経営合理化に直面する「混迷期」、そして後半は契約社員の正社員化にいたる「再生期」、というように二分される。まず混迷期には、組合は変形労働時間をはじめとする一連の労働強化にみまわれ（第1章）、また規制緩和

による競争激化を予期した会社によって人件費削減ばかりか、バス部門の分社化案（文字どおりのリストラ）に直面する（第2章）。明らかに組合は劣勢に立たされたわけが、ほどなくその流れは反転する。つまり広電支部は態勢を立て直しつつ、非正規社員の組織化に着手し（第3章）、ついに「新賃金制度」創設によって契約社員の正社員化を実現するにいたる（第4章）。

このように組合優位型にいたるには様々な苦難の経験があったわけだが、ここで問う必要があるのは、広電支部にあってはなぜあのような反転が可能だったのか、という点である。熊沢誠は、規制緩和のもとでの長時間労働をあつかった労作（『働きすぎに斃れて』）のなかで「（日本の）組合は総じて個人の受難に寄り添うことをやめている」と断じ、そこに労働組合の弱体化の極致をみたのだが、広電支部がその轍を踏まなかったのはなぜか。日本の労働組合について関心を寄せる者にとって、このことは最も興味深い点だといっている。

本書には、同支部が苦難のなかで身につけた「したたかな運動理念」が全編にわたって語られており、いわば「広電支部物語」ともいうべき面白さになっている。いくつか紹介しよう。

「労働運動は未来永劫にわたってつづく。一時の勝った負けたは問題ではない、長い目で勝てばいいのだ。すべての矛盾が次の運動の発展の契機となる」——この開き直った発想が広電支部の伝統的発想だという（161頁）。当然すぎる内容なので読み過ぎられるかもしれないが、簡単にいえば「小さな負けには拘泥しない」ということだ。きわめて冷静で現実的ではないか。同支部ではこれを「原則は堅固に、対応は柔軟に」とも表現しているが、その場合の基準は「組合員の勤労意欲の維持・向上」にあるという（115頁）。雇用を守るのは当然とした上で、職場は活気に充ちていなければならないというわけだ。

広電支部は、必要な場合にはスト態勢を確立し、実際にストに突入もする。組合員たちの意見表明は活発で、時には執行部が立ち往生するほど厳しい意見や批判を繰り広げることもある。日本の労働組合にしばしばみられる「空洞化」は同支部には無縁のようだ。と同時に、支部の発想はとても幅が広い。

例えば1996年秋闘において、会社側はバス部門の人件費削減がもはや猶予ならぬと主張したのだが、これにたいし組合は、バス部門の構造的赤字への対応策

として「交通政策論」を提案するのである。内容を一言でいうと、増収をはかるためには市当局や周辺自治体と連携し、より快適・便利な交通サービスを提供できる交通政策を立案すべきだ、というものである。「雇用と職場を守る」ために公共交通の「社会的機能」を向上させるという発想もまた、広電支部の伝統的なものだった(96頁以降)。なお、支部が職場から汲み上げた改善提案は実に125項目にのぼったという。

3. 新賃金制度の創設

さて、第3・4章は「契約社員の正社員化」に向けて労使が協調と対立をくりかえす、本書における最も緊張感あふれた場面である。しかも同社の経営状態の推移が労使の動きに大きく影響を与えたから、事態はいっそう複雑化する。

広島電鉄に契約社員制度が導入されたのは2001年だが、会社側はその理由について「正社員の労働条件を守るため」「正社員の安全弁」と率直に語っている。契約社員の雇用は1年ごとの契約更新で、諸手当は支給されない。では彼らがもっぱら補助労働部門に従事するのかというと、そうではない。2001年から04年までに149人の契約社員が採用されているが、年齢は20～30代が中心で、職種の大半が運転士と車掌であるから、仕事の内容では正社員も契約社員もほとんど違いはない。当然ながら同じ職種のなかで人間的な亀裂が生ずる。組合はまず契約社員にも組合員資格を与え、ユニオンショップとすることにした。

だが最終的には、正社員化を名実ともに実現するには賃金体系を一本化できるかどうかにかかっている。しかも労使間には、賃金にたいする次のような考え方の相違があった。

会社側——職種・職責に応じた職種別賃金

組合側——勤続・年齢ごとの生活保障賃金プラス職務給

こうした相違を抱えながら労使交渉は3年以上におよんだ。その経過については読者にじっくりお読みいただきたいが、それは修正につぐ修正といった実に忍耐の要るプロセスだった。ここを読みながら強く思ったのは、広島電鉄では労使ともに誠実で優秀な人材に恵まれているということだ。そして双方の主張がかみ合った時点でついに新賃金制度が創設され、契約社員の正社員化が実現された。

その際、会社側は5億1,500万円の原資を積み増したという。また賃金が減額される組合員（主に中高年層）にたいしては、10年間をかけて緩やかに減額されるよう配慮された。

事態が現在もなお進行中だということもあるが、著者による「意義」と「課題」の提起は慎重である。自身は一步身を引きながら、むしろ多くの労働者の声を紹介することに力を入れているのだが、これも内容豊かな現実を一刀両断してはならないという配慮からなのだろう。

最後に一言。

私じしん若い頃の一時期、自動車産業の労使関係調査にたずさわったことがあった。充実した日々であったが、現場の当事者にとって研究者は所詮「余所者」だから、越えられぬ壁や緊張感もある。強靱な仮説、尽きることのない情熱がなければ調査は一步も進まなくなる。

著者・河西宏祐氏が研究者・調査者としてそのような一貫した姿勢を続けてこられたことに対し、私は文字どおり脱帽したい。そして若い研究者のなかから、第2・第3の河西宏祐氏が出てきてくれることを強く期待している。